

第二章 中学校教則綱領と〈国語関連科目〉の
教科書——中等学校国語教育史三 補遺——

浜本純逸

*前言 本稿は、上記「中等学校国語教育史 一、
二、三」につづく「中等学校国語教育史四」である。
但し、今回は、「三」の補遺から始める。

零章 漢文教育の成立——中等学校国語教育史0章
第一期 国語科成立以前における「国語」の教育

- 第一章 明治維新期の「国語」教
——中等学校国語教育史一——
- 第二章 中学校教則綱領と〈国語関連科目〉の
教科書——中等学校国語教育史二——
- 第三章 「国語及漢文」(「中学校令改正」)の
成立——中等学校国語教育史四——

中学校教則綱領と〈国語関連科目〉の

教科書——中等学校国語教育史三〈補遺〉

明治二〇年前後の授業

1 中村正直の講義 一八七五(明治八)年九月、最初の女子中等教育学校として東京女子師範学校(↓東京女子高等師範学校↓お茶の水女子大学)が設立された。校長は中村正直であった。中村正直校長の講義について、山川菊栄(一八九〇〈明治二三〉年〜一九八〇〈昭和五五〉年)は母・千世(一八五七〈安政四〉〜一九四七〈昭和二二〉)の回想を次のように伝えている。

先生は『文章規範』の講義も受けましたが、字句の末にとらわれず、精神をつかんだ生き生きとした講義ぶりの面白さ、千世は九十歳で世を終るころまでも昔を語ると先生のその声は今も耳に響いてくるようだといいました。幼年時代から神童といわれ、あの階級制度のやかましい時代に門番の子から幕府の儒者として旗本の格式にとりたてられたくらいの人物でしたから、大きい所があり、維新前昌平坂学問所で教えていたころでもだいたい他の儒者とはちがっていたそうです。女子師範の先生の一人に、昌平坂学問所で幕末の大儒佐藤一斎からも教わった人がいましたが、その話

先生は「いやそれはいけない、私はこうでなくてはならぬと思う」と強く自説を主張したが、中村先生の方「ああそうか、そういうふうで解してもさしつかえ、なかろう」というふうで枝葉の点にはあまりこだわらぬ人だったそうです。

先生は詩経をはじめたいの古典は暗記してしました。そのころは中国音を唐音といっていました。先生はその唐音がお得意で、中国人と会話も自由にでき、興にのると唐音で詩文を朗々とうたうことがあり、中でも韓退之のものなどはとくにお得意でした。

(山川菊栄『女二代の記』平凡社 一九七二年一月 一三二頁)

明治一〇年頃の授業風景である。中村正直は、字句の枝葉にとらわれない文章の精神を捉えて語る教師であった。

明治十七(一八八四)年一月二六日、文部省は府県に對する達二号をもって、「中学校通則」を制定し、『中学校教則大綱』実施の徹底を図った。

第一条 中学校ハ此通則ニ遵ヒテ此ヲ設置シ中人以上ノ業務ニ就ク者若クハ高等ノ学校ニ入ル者ノ為メニ忠孝彝倫ノ道ヲ本トシテ高等ノ普通学科ヲ授クヘキモノトス

この通則は、第一条に中学校の目的を掲げるとともに、「忠孝彝倫ノ道ヲ本トシテ」という句を新たに挿入したことににより、皇室への忠と父母への孝を強調した。その後の「倫理」の議論に「皇室への忠」と「父母への孝」はいづれがより重要か、という問いを投げかけることになった。また、初等中学校のみを置く中学校(四年制)が許可されることになった。

小柴昌子によれば、当時の公立中等学校数と生徒数は左

表のとおりであった。

(一九八八)年五月
銀河書房 三四頁)

- 公立女学校は、東京高等学校他京都・群馬などに設された計九校、生徒数六一六人に過ぎなかった。
- 一八八六(明治一九)年大阪女子師範女学科が大坂府女学校へ昇格
- 一八八七(明治二〇)年市立淡海女学校開設↓彦根高等女学校
- 一八八七(明治二〇)年高知県尋常中学校(現追手前高校)に女子部開設。
- 一八八八(明治二一)年滋賀県教育会立女学校
- 一八八八(明治二一)年東京府高等女学校↓一九〇一年、東京府立第一高等女学校↓都立白鷗高等学校

次に当時の授業回想を二例掲げる。

○明治十八年頃の授業
(姫路中学校 第七回卒業片岡 清の回想)

春風の吹く春山(弟彦一八三二〜九九) 老師——姫

中等教育就学状況

明治	中 学 校			女 学 校			中学生比
	校数	生徒数	就学兒比	校数	生徒数	就学兒比	
16	173	14,763	0.71%	7	450人	0.05	3.05%
18	106	14,084	0.64	9	616	0.06	4.4
20	48	10,177	0.41	18	2,363	0.26	23.2
22	53	11,530	0.48	25	3,273	0.32	28.4

中在学中、思いで深く印象に残りおるは国学大家春山弟彦老先生講義の時間です。師は常に温顔の好々爺にして笑顔たたえて教室に入り、各生徒は悉く満悦を以て師を迎えたものにて笛を吹き鳴らすものもありました。生徒を叱るような事は一度もなく、教室はその時間に限り、春風駘蕩の風景でした。「俊基朝臣東下り」の一節「落下の雪に踏み迷ふ、片野の春の桜狩り」と師が柔かにして優しき音声にて静かに読み下せば、列席生徒一同これに和して一の語を放ち、師は次の章を読み生徒またこれに和す。かくして順を追うに従い、生徒の声は次第に高くなり、高調は喧燥を呼び、興味を覚えて足拍子を踏む生徒もあらわれます。先生の温顔少しも変ずることなく、破顔一笑「今日は此位」と述べ、飄逸として教室を去ります。唐詩の画を観るようです。老師の風格まことに貴ぶべく、老先生の存在は姫路中学に萬鈞の重を与えた訳です。（「姫中・姫路西高百年史」編集委員会『「姫中・姫路西高百年史」一九七八（昭和五三）年十月 新光出版 三〇頁】

○明治二一年頃の授業 一八八七（明治二〇）年十四歳で私立米沢中学校に入学した五十嵐力は、国語の学習体験を次のように回想している。

初めに生徒に読ませて講義をさせる。むつかしい所は、教師が一度やり返す。質問がなければ先きへ進む。かう云ふ遣り方である。考へて見ると、何の為に国語をやるのやら訳が分らない。趣味がないと云つたら此の上なしである。たとへば果てしもない沙漠の中を熱風に吹かれながら汽車旅行をするやうなものである。中で一寸停車する処は「落花の雪」「扇のまと」といったやうな中古文ばかり。これはまづ当然でもあらう。然し六ヶしい言葉の比較的少ない現代の文章など、：

：中略……に至ると此処には余りむつかしい字がないから、家で一度読んで下さい、そして解らぬ所があったら質問なさい、では先きへ進ませう。」と云つて飛ぶやうに進む。国語は字を覚える為めの学科のやうに誤解して居られるらしい。余りに趣味がなさ過ぎるから、時に字義など聞くと、しちくどい程よく教へてくれられる。其の代り色も味もない、単調なものである。（五十嵐力『作文三十三講』大正二年十一月 二五日、七五・七六頁）

第一例は、尊敬する老師の朗読に心酔し、従つて音読し、朗読と音読を繰り返していくに従つて感情が高まつていく様子が活写されている。回想記は一般に年月とともに美化される傾向があるが、そのことを考慮して上でも朗読で深まつていく授業であつたようである。

第二例は、教師による難語解説を主にした授業であつた。五十嵐少年には、自分の受けた国文の授業が「無趣味極まつたつまらないもの」と感じられていた。

いずれも教師中心の授業であるが、教師の人格と味読が学習の深淺を左右している。ここに明治二〇年代の国文教育方法の一端を見ることができよう。